



Title	明治末から大正期における裁断技術の向上を図る動きについて：男性洋服の製作的側面に見る日本服飾の近代化の位相
Author(s)	安城, 寿子
Citation	デザイン理論. 2011, 58, p. 19-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53468
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治末から大正期における裁断技術の向上を図る動きについて — 男性洋服の製作的側面に見る日本服飾の近代化の位相 —

安 城 寿 子

お茶の水女子大学大学院博士後期課程

キーワード

男性洋服、裁断、明治末から大正期、近代化

Men's Western clothes, Cutting, From the end of the Meiji era to the Taisho era, Modernization

はじめに

1 明治末から大正期における裁断技術の向上を図る動きの概要

2 明治末から大正期における裁断技術の向上を図る動きの背景

3 裁断技術の向上を図る動きの具体的事例をめぐる検討

おわりに

はじめに

周知の通り、近代の日本においては、まず男性洋服という新しい衣服が受容され、それをめぐって多様な文化が形成された。この点を踏まえるなら、男性洋服の歴史を問うことには、『性とスーツ』の著者、アン・ホランダーが強調した以上の意味がありそうだ¹が、手つかずの課題が多い。本稿は、こうした未着手の課題をめぐる取り組みの一環として、明治末から大正期にかけて立ち現われた男性洋服の裁断技術の向上を図る動きに注目するものである。明治末以降、洋服製作の現場では、普遍的——誰が試みても同じ結果に至り、あらゆる体型に適用可能な——で合理的な裁断法を求める動きが活発化した。こうした動向は、和服と異なる構造を持つ洋服がいかにして受容されたかを示す事例の一つであるだけではなく、製作あるいは技術的側面から、日本服飾の近代化という問題をとらえ直すための鍵を与えてくれるだろう。以下、第一章ではこうした動きの概要を俯瞰し、第二章でその背景としての社会的変化について述べた上で、第三章ではいくつかの事例に検討を加えることで、その具体像に迫ることとしたい。

1 明治末から大正期における裁断技術の向上を図る動きの概要

和裁の技術を修めた後洋裁を学び、さらなる研鑽を積むべく明治29（1896）年に渡米した

という岩村秀太郎は、明治39（1906）年の著書『洋服裁縫師必携書』の緒言において、次のように述べている。

我国從来洋服裁縫師の通弊としては縫に重きを置き裁を軽んじ過ぎる風あり故に縫方に於ては歐米裁縫師に劣ることなきも裁方の原理に明らかならざるが故に如何に縫ひにのみ注意するも出来上りたる後其割に形よからぬ事あり（中略）されば我国の裁縫師は徒らに目前の局部の縫にのみ力を入るゝの弊を去り全体に於ての容姿に注意せざる時は往々着服者の品格に関し外国にては信用にも影響を及ぼすことあり²

日本の洋服の裁断技術が縫製技術に劣るという指摘は、洋服製作の方法を説いた資料にしばしば登場するものだが、これは、その早い例の一つである。ここから読み取れるのは、裁断という工程の処理が、当時の洋服の作り手にとって、二重の意味での課題——洋服製作上最も重要な工程であると同時に、それを処理する技術が西洋に立ち遅れている工程でもある——であったということだ。この問題を考える上で、日本においては伝統的に直線裁断が主流で、衣服を着用者の体型に合わせることに価値が置かれてこなかったことを無視することはできない。和服が仕立てられる際、袖付け線と着用者の肩が合っているか、脇ぐりを大きく取り過ぎたことによる布のもたつきがないかといったことは問題にならない。直線裁断によって身体各部位を覆うのに過不足のない布の分量を確保し、それらを縫い合わせて一つの平面を作り、着付けの段階で各々の身体に合わせた調整を行うという発想に基づく衣服だからだ。一方の洋服は、それがそれとして成立する上で、人間の身体の構造をなぞった構造を備えていることは不可欠である。洋服の構造と身体の構造のずれから着用段階で不自然さが生じるそれは、失敗作とみなされる。だからこそ、洋服の裁断工程においては、和服に比べてはるかに複雑な作業を正確に処理することが求められるのである。日本における第一世代の洋服の作り手が足袋職人から起きたという話は³、それが一つの伝承に過ぎないことを踏まえてなお、こうした和服と洋服の違いを端的に示すものとして、興味深い。この話は、「足袋職人まで駆り出されるほど人材が不足していた」と解釈されることがあるが、正しくは、型紙を用いた曲線裁断の経験を持つ足袋職人が、和服の職人以上に重宝されたという趣旨の逸話である。なるほど、足袋は足の構造をなぞった構造を備えているから、その製作の根本にある発想は、和服に比べて洋服に近いと言える。もっとも、全ての洋服裁縫師が足袋職出身であったわけではないし、足袋と洋服とでは作業の要點が違ってくるため、裁断という工程が一つの課題であることに変わりはなかった。それゆえ、その克服が図られなければならなかつたのである⁴。

さて、岩村秀太郎は、大正5（1916）年に著した『帝国裁縫大図解』の諸言において、『洋

『服裁縫師必携書』刊行後の洋服業界の進歩に触れ、「爾来十年の星霜をふると共に洋服界も一新し裁方に於ても角尺の裏目を容易に計算し得らるゝに至」ったと述べている⁵。洋服裁断に用いる定規の一つである角尺には、「本尺」と呼ばれる目盛りで測った長さの二分の一、三分の一、四分の一等に当たる長さが一目で分かる目盛りが刻まれている〔図1〕⁶。岩村の言う「裏目」とは、これらの目盛りを指していると思われるが、この「裏目」を用いることで、容易な「割出し」——裁断をめぐる作業の一つ⁷——が可能になる。今しがた引用した岩村の言葉は、道具の使用法の普及という形で起こった進歩に関する一人の洋服の作り手の証言である。角尺の使用法は、岩村自身も、『洋服裁縫師必携書』で詳細な解説を加えているところであり、あるいは、本稿第三章で検討を加える『新式洋服裁断法』には、角尺に加え、「ダイレクトメジャー」というテープ状の採寸器具の使用法解説を見る事ができるが⁸、明治末から大正期にかけて普及されようとしたのは、こうした道具の使用法だけではなかった。正確なところを述べるならば、この時期、あらゆる体型に適用可能な裁断法を研究しようとする動きが立ち現れ、その成果を知らしめるための裁断教本が相次いで刊行される中で⁹、容易な「割出し」を可能にする道具の使用法が説かれたのである。さらに指摘しておかなければならぬのは、それらの裁断教本の大半が、洋服製作を生業とする人々によって同業者に向けて書かれ、多くの場合、自家裁縫の可能性を想定していないものであったということだ。言い方を換えるなら、こうした動きは、職業的な必要に駆られた業界内の動きとして立ち現われ、業界内で受容されるべく発信されたということである。

こうした動きが、ただ個人的な研究の連続にとどまることなく、同業者たちのコミュニティの中で高まりを見せたであろうことは、見落とされるべきでない。本稿第三章で取り上げる洋服技術大会の盛況ぶり——同大会には、同じく第三章で検討を加える『大日本和田式洋服裁断書』を著した和田栄吉も参加している¹⁰——や、業界紙である『日本毛織物新報』紙上で交わされたという「裁断原則」をめぐる論争は、裁断技術を向上させなければならないという意識が一定の広がりのもとに共有されていたことを示している。明治末から大正期にかけて発行されていたとされる同業者向けの新聞雑誌の多くは現存しないため、その内容は二次資料からしかうかがうことができず、また、創刊年や発行部数も定かではないが、こうした媒体が、裁断技術の向上という課題に対する意識を喚起する装置として機能していたことは確かであろう¹¹。

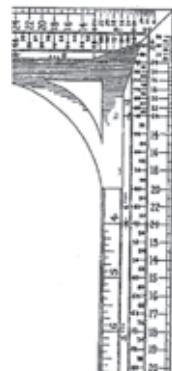


図1 角尺に見られる
「裏目」
（『新式洋服裁断法』3頁より）

2 明治末から大正期における裁断技術の向上を図る動きの背景

明治末から大正期にかけて裁断技術の向上を図る動きが立ち現われた背景としては、幕末以来の経験の蓄積による洋服製作の基本的技術の消化、学校教育の普及とともに洋服の作り手たちの読み書き能力の向上¹²、出版流通の全国的なネットワークの発達など¹³、様々な要因を挙げることができるが、これらの要因に加えて見落とすことができないのは、ホワイトカラーの増加によって起こった洋服需要の増大である。既に多くの指摘が見られる通り¹⁴、日露戦争後の産業資本主義の発達と都市人口の膨張は、サービス業や知識労働に従事するホワイトカラーを大量に産み出し、1920年代には、彼らを意味する「新中間層」なる社会階層の概念が定着を見せた¹⁵。彼らは、「勤め人」として企業や官公庁から得た俸給で生計を立てるとする点で、「旧中間層」——商人、起業家、地主など——とは区別され、この時代を特徴づける新たな階層集団として注目された。官公庁勤務の吏員については、統計資料から確かな数の推移を知ることができるが、『明治大正国勢総覧』によれば、明治20（1887）年に44,114人だった文官総数は、明治30（1897）年に65,760人、明治40（1907）年に152,201人、大正6（1917）年には228,198人となっており〔表1〕¹⁶、この二十年間で五倍以上に増加していることが分かる。

表1 明治から大正にかけての文官人員数推移（『明治大正国勢総覧』をもとに作成）

年次(年)	勤任官(人)	委任官(人)	判任官(人)	合計	雇(人)	文官人員総数(人)
明治20(1887)	151	3,402	25,421	28,974	15,140	44,114
30(1897)	210	4,316	38,542	43,068	22,692	65,760
40(1907)	416	6,598	52,057	59,071	93,130	152,201
大正6(1917)	774	8,800	72,567	82,141	146,057	228,198

こうした変化は、そのまま、彼らによって身に着けられる背広やフロック・コートの需要の増大を意味していた。明治45（1912）年5月5日の『読売新聞』には、「今日に於ては勤め人と言へば、制服の定め無きものと雖も洋服を纏ふを常とし、日本服の羽織袴や着流しにて出勤し執務する者は甚だ少なし。」とあり¹⁷、また、大正11（1922）年7月18日の『大阪朝日新聞』は、「何故勤人が世知辛さを感じ易いかと云へば体面があるからで、フロックコートも要る、燕尾服も要る、職人職工や町人とは段階が違ふといふ見識^{ママ}？からして生活難てふ言語道断の悪税を課せられて居る」¹⁸として、官公庁や民間企業で働くホワイトカラーの生活難問題を取り上げているが、ここからは、彼らにとって、洋服一式が必要不可欠の「ユニフォーム」であったことがうかがわれる。こうして洋服を身に着けざるを得ない身体が増える中で、あらゆる体型に理想的な洋服を提供するという課題は、その作り手たちによって、より強く意識されたことだろう。このことを物語る資料として、ここでは、『日本洋服沿革史』の一節を紹介したい。昭和5（1930）年に大阪洋服商同業組合によって編纂された同書は、「顧みるに洋服を贅沢品であると唱へられたのは事実上日露戦役以前の事である。即ち洋服が社交用より日常用に変化するに及び洋服必要の緊急説が行はれた結果、戦後の日本には洋服の美術的進化を招來

するに至った」と述べ、こうした日露戦争後の動向を「洋服美術來」として記録している¹⁹。太平洋戦争以前の服飾関連の資料において、「美術」という語は、技術の向上に裏打ちされた美觀を意味してしばしば用いられたが、以上の記述は、それが後年の回想であることを差し引いてなお、洋服の作り手たちの記憶に、日露戦争後の洋服需要の増大を契機とする変化が刻まれていたことを示すものと言えるだろう。

3 裁断技術の向上を図る動きの具体的な事例をめぐる検討

ここでは、前章まで論じてきた裁断技術の向上を図る動きの具体像に迫るために、まず、明治43（1910）年に刊行された『新式洋服裁断法』という裁断教本に光を当てる。しかし、一つの資料に検討を加えるだけでは、この動きがはらむ多様性や対立までをもとらえることはできない。そのため、本章第二節と三節では、いま二つの具体的な事例として、大正5（1916）年刊行の裁断教本『大日本和田式洋服裁断書』と、大正5（1916）年と翌6年の二回開催された洋服技術大会という催しを取り上げることにする。

3-1 東京洋装研究会『新式洋服裁断法』について

これまで一口に「裁断」と言ってきたが、それはただ布を裁つ作業を意味していたわけではない。裁断をめぐる問題として明治末から大正期にかけて議論されたのは、むしろ、布を裁つ以前の型紙の作図をいかにして行うかということで、具体的に言えば、採寸結果をもとに「割出し」を行い、必要に応じた「補正」を加えて型紙を起こす方法論であった。「割出し」とは、型紙の基本となる線の長さを胸囲や胴囲に応じて変化するものとして確定すること、「補正」とは、割出しをもとに作図された型紙に注文主の体型に合わせた微調整を加えることである。例えば注文主が肥満体型である場合の補正は、型紙の前方下臍部周辺に加えられる。これは、肥満による脂肪が腹部につきやすいためだ。この例が示すように、注文主の身体的特徴によって、補正を加える部分はある程度決まつてくる²⁰。裁断技術の向上を図る動きとは、職人的な勘に頼ることなく、こうした作業の準拠となるべき合理的かつ普遍的な方法論を見出し、それを普及させようとする動きに他ならなかった。ここでは、明治43（1910）年に東京洋装研究会²¹によって編纂刊行された裁断教本『新式洋服裁断法』を例に、その具体像に迫ることにしたい。

まず、同書の諸言を引用しよう。

洋服裁縫の事、現下に在っては殆んど世界共通の必要技術となり、美術、衛生、経済等の各方面より、之れを学理的に又実際的に研究するの風、近來勃然として世界に起るを

見る、又盛んなりと云ふべし、然れども洋の東西、其種族を異にすると共に、骨格筋肉の形状と、毛髪、皮膚の色彩と他種々の相違を生ずるあり、一型式の洋服裁断法を以てしては、到底彼の服装の真価を發揮し能はざるは素より云ふを得ざるなり（中略）洋服裁断の法や、技術者其人を易ふると共に、多くは其法式を異にせり、法式異なるも、其帰着点に於て一なるを得ば敢て不可なし、然も甚だ同一ならざるを奈何せん、罪はこれ無標準なる手加減流にあると云はずんばあらず、本会之れが研究に従事する事多年、茲に漸く一の裁断法を得、プラクチカル、ピボット式と称するものこれなり、此式の特徴とする處は、其体格の如何を問はず、大小彎曲、何ものにも自在に之れを応用し得るに在り²²

ここには、誰が試みても同じ結果に至るということに加え、あらゆる体型に理想的な洋服を提供するという課題に対する明確な意識を見て取ることができる。全十七章から成る同書では、背広、フロック、モーニングなど、あらゆる種類の洋服の割出し方法が説かれ、各アイテムについて、注文主が「肥大体」である場合の補正の指示が加えられている。また、第十三章では、「各種変体に対する作図研究」として、「猫背」をはじめとする例外的体型の注文主にどう対処すべきかが説かれており、なるほど、それは、洋服製作において想定される全ての可能性について、実践的かつ体系的な解答を示す試みと言える。

次に、標準体型用背広の場合を例に、実際の作図の作業がどのようなものであったかを確認しよう。作図の作業は、単純な基本線の確定に始まり〔図2〕、さらに細かい線を書き加えていくことで〔図3・4〕、最終的な型紙が完成される〔図5〕。この時、例えばソとヨを結ぶ線は〔図3〕、そのまま、前身頃のボタンで留められる部分の線となるが〔図5〕、チからソまでの長さは、上胴囲の二分の一プラスインチ、ヲからヨまでの長さは、上胴囲の二分の一プラス4時というように、それぞれの点は、注文主の採寸結果に一定不变の長さを加えることで確定される。あるいは、袖ぐりの作図で不可欠となるラの点は〔図3〕、口を中心点にへから引いた弧線、そしてこの弧



図2 標準体型用背広型紙
作図ーその1ー
（『新式洋服裁断法』
9頁より）

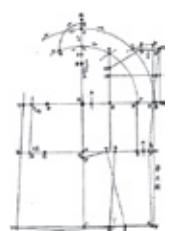


図4 標準体型用背広型紙
作図ーその3ー
（『新式洋服裁断法』
13頁より）

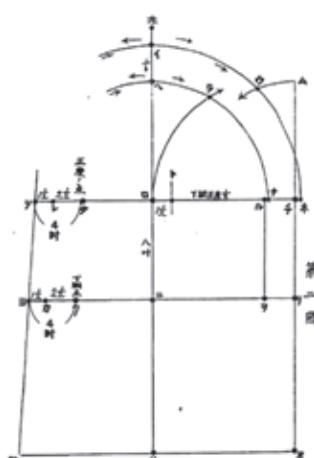


図3 標準体型用背広型紙作図ーその2ー
（『新式洋服裁断法』11頁をもとに
作成）

線と口チの交点であるナを中心点に口から引いた弧線の交点にあたり、ここに、ピボット式のピボット式たる所以を見ることがある。すなわち、旋回運動の中心点を意味する「ピボット」という語に示される通り、ここでは、既に得られた二点間の長さを半径とする弧線を引く作業が指示されているのである。こうした作業は、注文主が標準体型である限り、採寸結果の個人差によらず、変わることがない。

ところで、同書において、型紙の補正をめぐって、洋服の「美しさ」への言及が見られることは興味深い。ここで、補正の手順の詳細を確認している余裕はないが、肥満体型用の背広に関する補正の解説では、先述の通り、脂肪のつきやすい前方下臍部にゆとりを生みだすための作業が指示された上で、それだけでは「裾のみ非常に突出し、格好のわるきもの」となるとの理由から、さらに二段階の作業が推奨され、「茲に初めて完全なる且つ美しき形となる」ことが強調されている²³。この点を踏まえるならば、同書の裁断法は、洋服が洋服として当然備えているべき機能性とともに、理想として思い描かれる「美しい洋装」の実現を企図するものであったと言うことができるだろう。

3-2: 和田栄吉『大日本和田式洋服裁断書』について

『大日本和田式洋服裁断書』は、大正5（1916）年12月に和田栄吉によって著された裁断教本である。当時の東京洋服商工同業組合副組長を務めた福田仲次郎は、同書に寄せた祝辞の中で、大正5年7月20日に東京芝で開催された和田栄吉による大日本和田式洋服裁断法（以下、「和田式裁断法」と略す）の講演を聞き、「同氏の裁断法は初心者に教へる可く最も適当であるとの信念を固めて」「約十日間の日数で神田区内に於ても予が主催で同氏の講演を催ほすことにして

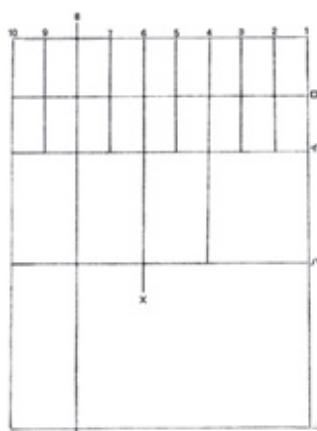


図6 和田式裁断法第一図
（『大日本和田式洋服裁断書』9頁をもとに作成）

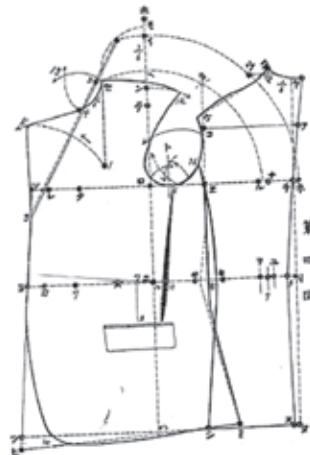


図5 標準体型用背広型紙作図ーその4ー
（『新式洋服裁断法』15頁より）

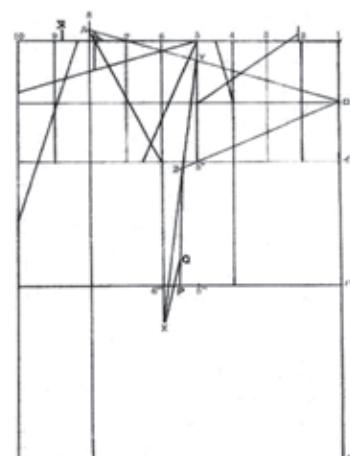
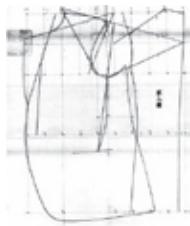


図7 和田式裁断法基本割出し図
（『大日本和田式洋服裁断書』13頁をもとに作成）



参考 和田式裁断法標準体型用背広型紙の完成図
（『大日本和田式洋服裁断書』別冊より）

た」と記している²⁴。また、次項で検討を加える日本毛織物新報社主催の洋服技術大会の記録によれば、和田は、同年8月開催の第一回洋服技術大会においても和田式裁断法の講演を行っており²⁵、前出の『東京洋服商工同業組合沿革史』にも、同年10月、京橋区内で同様の講演が行われたとの記録が見られることから²⁶、東京に限って言えば、同裁断法は、『大日本和田式洋服裁断書』の刊行以前に、それなりの知名度を獲得していたと考えられる²⁷。

前節で検討を加えた『新式洋服裁断法』をはじめ、裁断技術の向上を図る動きの中で刊行された裁断教本の中には、研究の末に編み出された裁断法のみを示し、それが何ゆえそうした方法論を取るのか、その裁断法の出発点にある思想がいかなるものであるかを明らかにしないものが多い。『大日本和田式洋服裁断書』が検討に値すると思われる原因是、同書に収められた「人体論」と題する論考において、和田式裁断法の根本にある思想が明快な言葉で語られているためである。そこからは、著者の和田栄吉が裁断という課題と向き合う際にたどった具体的な思考の流れを読み取ることができる。

ここで、和田式裁断法がどのようなものであったかを確認することにしよう。和田式裁断法の作図は、縦横線によって構成される簡潔な図から始まる〔図6〕。全ての横線と縦線は直角で交わり、例えば1からハ、1から8までの長さはいずれも上胴囲の二分の一、2から7までの点はこの長さを七等分した地点に位置し、6から出る縦線は、ハから出る横線との交点を過ぎ、上胴囲の二分の一の「七分の一に相当する寸法の処に止む」というように、先の『新式洋服裁断法』同様、注文主の採寸結果をもとに行われる。さらに、型紙の基本となる線を割出す作業について見ると〔図7〕、ここでも、例えばトからヌ、PからQまでの長さはいずれも上胴囲の二分の一の七分の一に相当し、繰り返し「七分の一」という数字が登場していることに気づかされるが、それが何ゆえ七分の一でなければならないかの答えは、先述の論考「人体論」の中に求めることができる。和田は、日本人と欧米人の人体比率の違いを示した図を掲げながら〔図8〕、和田式裁断法があえて七分の一という数字に基づくことの理由を次のように説明する。

此處で欧米人の体格と日本人の体格とを比較対照して見ると彼は身長が八等分されて股下が其半を占めて居るに反して我は身長を七等分し三を股下三を胴丈一を頭部とす、云ひ換ふれば胴の割合に足が短いと云ふ事が出来る（中略）欧米人の体格を基礎とした割出法であったなればこれを日本人に当て嵌める様に如何に苦心をして訂正を加へても單に訂正だけの改良であるから身体の何処かに何程かの無理が出来るのは当然である（中

略) 和田式裁断法は全く此目的の為めに生れたのであって正度を七等分し、そして何れの場合にも此正度七分の一を根拠として画線法を起したのは日本人の体格が七等分されると云ふ処に根拠を置いて居るのである(中略) 正度七分の一に応用したのは人体は正四角で縦にも横にも七等分して適當の部位に画線を置く事が出来ると云ふ定理から起したのである、(左右の手先を合せたる長と首の長とは共に七分の一) 今仮りに人体から首と手首即ち被服を以て蔽はない部位を取り去って考へて見ると矢張正四角であって七分の一を除かれるから其残りは六等分される事になる、すると縦と横とで六六三十六(七分の一は即ち九時なり) 即ち三十六時の正四角が出来る、此小さな正四角は身体の何れの部位に当て嵌められても要所から要所までの面積を持って居るのである²⁸

先の『新式洋服裁断法』をはじめとして、日本の裁断教本の多くは、イギリスやアメリカで用いられていた方法論を下敷きにしていただけに²⁹、人体は八頭身であるとの前提に基づいているのが通例であった。上記の引用に明らかのように、和田式裁断法は、そうした前提を離れ、日本人と欧米人の体型的特徴の違いを見据えるところを出発点とするものであったと言える。

明治末から大正期にかけて考案された多くの裁断法の中で、和田式裁断法は、とりわけ高く評価され、先にも触れた通り、東京以外の地方で参照されていた可能性も高いのだが、それは、同裁断法が、他でもない「日本人の身体」のために考案されたという点で他の裁断法と一線を画し、かつ、その作業が単純明快なものであったためかも知れない。いずれにしても、こうした探求を通じて、「日本人の身体」というものが見出され、欧米に源流を持つ洋服製作の知識の受動的な吸収にとどまることなく、その特性に応じた独自の方法論が編み出されていったことは、特筆に値する。

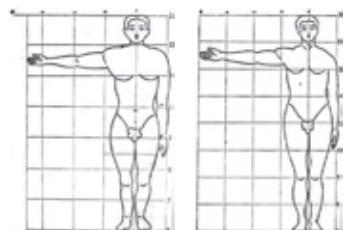


図8 欧米人(右)と日本人(左)の人体図
〔『大日本和田式洋服裁断書』81頁、85頁より〕

3-3：日本毛織物新報社主催洋服技術大会について

洋服技術大会は、東京洋服商工同業組合の機関紙に当たる³⁰『日本毛織物新報』を発行していた日本毛織物新報社の主催で大正5(1916)年と翌6年の二回行われた催しで、第一回大会の会場は東京神田の和強楽堂〔図9〕、会期は8月14日から16日で、第二回大会の会場は東京赤坂の三会堂、会期は3月10日から15日であった。同大会の記録である『洋服技術大会記念帳諸大家裁断傑作集』(以下、「大会記念帳」と略す)によれば、第一回大会の主な内容が、十四名の裁断師³¹による裁断技術の実演あるいは講演であったのに対し、第二回大会では、著



図9 第一回洋服技術大会の模様
(大会記念帳巻頭より)

名な洋服裁断師の実演や講演とともに、「己れの技術に多少の自信を有せる人々」に「同一種類の被服を作らしむる」競技会が行われ、審査員による選評を経て、一等から三等に六名の裁断師が選ばれたと言う³²。正確な参加者の数は明らかにされていないものの、第一回大会には、「北は樺太西は朝鮮大連の異域より」「意外に多く」の来場者があり、第二回大会では、「更に其人数を倍加した」と言う³³。

同大会がいかなる目的で開催されたかを理解するため、ここで、大会記念帳に収められた「開催の趣旨」の一部を引用しよう。

四五年以来漸く洋服の裁断上に割出しどと製図とか云ふ事が眞面目に講究される様になった、然しながらこれを以て直ちに裁断術の進歩と云ふことが出来やうか、況してや其割出しなるものが用ふる人毎に多少の相違を示して居る（中略）其割出し法が人毎に違ふ処に大会の興味が湧くのである、十名の優秀なる裁断師が用ひつゝある十種の割出し法、これが各如何なる地点から出発して何れの道を辿って如何なる種類の目的地に到達するか、即ち如何なる採寸法を用ひて如何なる割出補正法に據り而して如何なる出来上りを見るかゞ興味ある見物である（中略）我洋装技術界も優秀なる成果を得べき唯一の確定義を得る迄には吾人が云ふ意味の大会は必ず有要なるものである事を一般に意識せしめ度いのである³⁴。

前二節で取り上げた裁断教本が、自らの研究成果を最も優れた方法論として提示するものであったのに対し、洋服技術大会は、個々の裁断師が依拠する方法論の違いに注目し、それを披露し合うことで相互の見識を深めようとするところに一つの特徴があった。そこでは、登壇者による一方的な発信にとどまることなく、さかんな質疑応答が行われ、場面によっては議論が紛糾することもあったようだ。こと「裁断原則」という議題をめぐっては、業界内に意見の対立があったようで、大会記念帳は、第二回大会において、「原則認識論者」と「原則否認論者」による激しい応酬があったことを記録している。この対立は、業界を挙げて裁断技術の向上が図られようとする一方で、そうした動きそのものに懷疑的な立場があつたことを示すものだ。大会記念帳によれば、第一回大会終了後、業界内では「裁断原則」の是非を問う論争が起り、同大会の主催者である日本毛織物新報社刊の『日本毛織物新報』紙上にも、この問題に関する多くの投稿があったという。同紙は現存しないため³⁵、実際の投稿の内容を確認するこ

とは不可能だが、注文主の体型が千差万別であるのに、洋服の裁断が依拠すべき一定の「原則」などというものが必要なのかという議論であったようだ³⁶。

この「原則」という言葉については、説明が必要だろう。「原則」とは、割出しに関する用語である。先述の通り、割出しの作業では、胸囲や胴囲の数値をもとに型紙の各部分の寸法が算出される。「原則」とはこの時用いられる計算法のこと、この原則に基づいて作図された型紙の模範図〔図5〕は、「型体」「原則型体」と呼ばれる。型体は原則を理解するための重要な助けとなることから、裁断教本において型体が省略されることは皆無に等しい。しばしば誤解されるが、原則型体は型紙に似た図ではあっても、実際の裁断に用いられる型紙ではない。後述する辻正道が一つの型体を示しながら、「之れに依って型紙を起す事は出来るが此型紙を其儘用ひて成功し得べき所謂全備体は千人の中に一人も無い」と述べていたことからも分かるように³⁷、原則型体とは、それを目安に作図が行われるべき手本なのである。

さて、大会記念帳では、多くの発言者の言葉が紙幅の限界から割愛される中、東京洋服工商学校校長、辻正道が第二回大会最終日に行った講演については、ほぼ全文が活字に起こされている。それは、裁断原則をめぐる論争のあり様を端的に示すものだ。

原則体でない体型を変体と云ふ、原則体の種類は唯の一種であるが変体の種類は多種多様である、恰も其顔面の異なる如くに大同小異の形ちを示して居る、然し大略別けると肥満体に瘠瘦体、反身に屈身、怒り肩に撫で肩足の方では内輪に外輪、内彎曲に外彎曲位である、原則体に原則的の製図法ある如く以上の変体にも原則的の製図法がある、則ち肥満体であれば撫肩にし瘠瘦体であれば怒り肩に製図すると云ふのが原則的の製図法である、処が多勢の仲には肥満体であり乍ら肩の怒った人や瘠瘦体で撫肩の人がある、是れ等の人に対する製図法は原則其儘を応用したのでは不可能であるから必要の程度に変化を加へなければならぬ其変化の結果出来上ったものは原則に対して変則と云ふ事が出来る、云ふ迄もなく変則は原則が根拠となって生れるのである（中略）原則否認論者は斯くの如き状態を見て原則なしと云ふ事を無造作に絶叫するのであらふが原則が無くして補正とか変化とか云ふものが何を根拠として行はるゝか、斯くの如き思想に囚はれ居るから裁断に確信を持ち得ずして無用の縫ひ込みを設けたり正肯を得たる補正が行はれなかつたり流行に迷はされたり客に一々おどかされたりするのである³⁸。

ここから読み取れることは、原則認識論者が、例外に「例外」として対処するための前提となる原則を求めているのに対し、原則否認論者は、例外の存在をもってその必要を否定しているということだ。言い方を換えれば、いずれの立場も、原則をそのまま適用しえない体型の存

在は認めているが、それを原則との関係のもとにとらえて対処するのか、個々の事例はあくまで個々の事例として扱うのかというところに、両者の対立がある。洋服技術大会は原則認識の立場に基づく催しであつただけに、大会記念帳は、原則否認論者の発言の多くを伝えていないが、清水進朔という原則否認論者の「原則は絶対に無し原則を断定するは技術家の技量を無視したるものなり」という言葉と³⁹、辻正道が講演の最後に述べた以下の言葉は、両者の立脚点の相違をさらに明確に示している。

完全な洋服を作るに必要な条件と云へば採寸を精確に行ふこと、体型の見解を精確に行ふてよく其特徴を認識することである、技量とか巧拙とか云ふ事は此一事に於てのみ云ひ得る事で他は悉く学むで修得し得るべき事柄である⁴⁰

洋服製作の技術は、長らく、徒弟修業の経験によってこそ身に付けられるものであった⁴¹。裁断の勘所を言語化しないものとして修得してきた裁断師たちにあって、一律の理論が職人的経験に優先されるかのような動きへの反発が起つたことは、当然と言えば当然のなりゆきと言える。普遍的で合理的な裁断法を模索する動きを推し進めてきたのは、他でもない裁断師という存在であったが、ここでは少なくとも、その一方で、それに抗う裁断師たちの姿があつたことを指摘しておきたい。

おわりに

前章までの議論から、明治末から大正期にかけて立ち現れた裁断技術の向上を図る動きの詳細が明らかになった。そこでは、誰によって誰のための洋服が製作されようと同様の結果に至るための方法論が模索され、その過程で、「日本人の身体」というものが見出される一方、あらゆる「例外」を体系的な理論のうちに回収しようとする力への抵抗もまた、存在した。従来の服飾史の研究は、しばしば「洋装化」の同義語として日本服飾の「近代化」を語り、あるいは、「近代化」の意味するところを明確にしないまま、近代と呼ばれる時代区分に属する服飾の事例を語ってきたが、これまで論じてきた通り、男性洋服が一応の普及を始めた後、その製作をめぐる困難を克服しようとする動きが立ち現れ、その動きを通じて、合理性、普遍性あるいは効率といった近代的諸価値⁴²が追求されていったことは、非常に重要である。本稿の冒頭で登場したアン・ホランダーは、欧米における男性テイラード・スーツの誕生と普及の歴史をつづる中で、様々な含意とともに、テイラード・スーツそれ自体が「モダン」の表象であると論じた⁴³。彼女は、テイラード・スーツという衣服において政治的モダンが実現される——それが「有閑階級であるなしにかかわらず」享受することのできるものとなる——過程で、製

作的側面における合理性や普遍性の徹底が起こったという興味深い指摘を行っているが⁴⁴、本稿が論じてきた裁断技術の向上を図る動きにも、同様の歴史的意義を見出すことができる。すなわち、それは、洋服製作の技術に体系立った理論を与え、理想的な洋服を万人に提供しようとする動きであったという点で、服飾の近代化の一つの形と見ることができるのである。

もっとも、こうした動きが、あくまで「万人に等しく」を志向するものに過ぎなかつたことを見落としてはならない。初田亭がつとに指摘したように⁴⁵、日露戦争後増加を見せたホワイトカラー——先述の通り、彼らにとって、洋服一式は必要不可欠の「ユニフォーム」であつた——は、統計上、決して「大衆」の同義語たりえず、就業人口に占めるその割合は、東京に限つて見ても、大正9（1920）年に12.9%、昭和5（1930）年に13.5%であつた⁴⁶。また、一口にホワイトカラーと言っても、出自や学歴による格差は大きく、それゆえ、理想的な「文化生活」⁴⁷を享受しうる人々とそうでない人々とが存在した⁴⁸。以上の点を踏まえた時に問わなければならないのは、受容の側面において、洋服一式が、いかに万人に等しく普及しえなかつたかということだろう。この問題については、本稿が捨象してきた既成服の問題とともに⁴⁹、稿を改めて論じることとする。

謝　　辞

本稿の執筆に当たり、東京洋服商工協同組合理事の井上澄人氏には、洋服裁断の技術や用語を理解する上で助ける多くのご教示をいただきました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

注

- 1 アン・ホランダー『性とスーツ』中野香織訳、白水社、1997年、12頁。
- 2 岩村秀太郎『洋服裁縫師必携書』洋服裁縫師必携書発行所、1906年、1頁。
- 3 大阪洋服商同業組合『日本洋服沿革史』1930年、29-33頁。また、以下の資料にも、足袋と洋服の裁断法の類似を指摘する記述が見られる。加藤益三郎『最新簡易洋服截断法』岡本偉業館、1903年、1頁。
- 4 この工程をめぐる洋服の作り手たちの苦労は、以下の資料にうかがうことができる。辻清『洋服店の経営虎の巻』洋服通信社、1925年、112頁。東京洋服商工同業組合神田区部『東京洋服商工同業組合沿革史』1941年、79-80頁。
- 5 岩村秀太郎『帝国裁縫大図解』女学社ほか、1916年、2頁。
- 6 ここでは、「裏目」の目盛りがより鮮明に印刷されている『新式洋服裁断法』の角尺の図を示した。最も内側に刻まれた目盛りが「本尺」であり、外側に刻まれた細かい目盛りが「裏目」である。ちなみに、東京洋服商工協同組合理事の井上澄人氏によれば、「裏目」という用語は、洋服業界で必ずしも一般的なものではないと言う。

- 7 本稿第三章第一節参照。
- 8 東京洋装研究会、前掲書、4-5頁。
- 9 本稿で言及したもののに他に、例えば次のようなものがある。井上吉三郎『井上式裁断新書』井上洋服店、1909年。畠山兼吉『実用洋服裁断法』実用洋服裁断法発行所、1910年。浪江南州『簡易ミチヨル式洋服裁断図鑑』三村正太郎、1912年。平山桂蔵『洋服裁断術』雄文社、1915年。堀内善吉『洋服裁断法軌範』米国洋服学校、1915年。太田栄太郎『E O式洋服裁断法』内外織物新報社、1917年。佐伯猪八郎『佐伯式洋服裁断法指針』佐伯式洋服裁断法宣伝会、1923年。丸山幸作『丸山式洋服裁断全書』日本毛織物新報社、1926年。なお、本稿第三章で検討を加える大日本和田式洋服裁断法がそうであったように、こうした裁断法の普及には、裁断教本のみならず、考案者自身が営む講習会の果たす役割が大きかったと思われる。
- 10 米田季吉『洋服技術大会記念帳諸大家裁断傑作集』日本毛織物新報社、1917年、17頁。
- 11 以下の資料でも、裁断技術の向上が図られた要因の一つとして、「各種の機関新聞、雑誌が続出した」ことが挙げられている。辻清、前掲書、112頁。
- 12 男子就学率は、明治6（1873）年に39.90%，明治26（1893）年に74.76%，明治36（1903）年に96.59%，大正2（1913）年には98.74%まで上昇している（文部省『日本の成長と教育』1962年、180頁）。
- 13 南博、社会心理研究所『大正文化』勁草書房、1987年、128頁。
- 14 先駆的な研究としては、南博と社会心理研究所の前掲書がある。また、「新中間層」の階層的特質を分析した研究としては、中村牧子のそれを挙げておきたい。中村牧子「新中間層の誕生」原純輔編『日本の階層システム 1 近代化と社会階層』東京大学出版会、2000年、47-63頁。
- 15 ルイーズ・ヤング「『近代』を売り出す——戦期の百貨店、消費文化そして新中間層——」岡本公一訳、バーバラ・佐藤編『日常生活の誕生——戦間期日本の文化変容——』柏書房、2007年、199-227頁。
- 16 東洋経済新報社『明治大正国勢総覧』1927年、664頁。
- 17 「二重の費用」『読売新聞』1912年5月5日、6面。
- 18 「生活難問題（九）——生活難の現状——（六）勤人」『大阪朝日新聞』1912年7月18日、3面。
- 19 大阪洋服商同業組合、前掲書、186頁。
- 20 「補正」という語は、標準的な体型のための標準的な裁断法以外のあらゆる微調整を意味して用いられる一方、肥満体型や猫背といった例外的体型のための典型的でない微調整——例外の中のさらなる例外——のみを意味して用いられる場合もある。本稿第三章三節で引用する辻正道の講演では、後者の意味で「補正」という語が登場する。
- 21 東京洋装研究会編の『洋服大全』では、同会が、『洋裁界』という定期刊行物の編纂を手がけ、『洋服裁縫師慣用英語字典』なる英和辞典も刊行したと述べられていることから、洋服製作の専門的な知識を持つ人々による、技術の向上を目的とした集団であったと考えられる（東京洋装研究会『洋服大全』1908年、5-6頁）。なお、これらの定期刊行物と辞典は、管見の限りで、現存しない。
- 22 東京洋装研究会『新式洋服裁断法』1910年、1頁。

- 23 同前, 48-49頁。
- 24 和田栄吉『大日本和田式洋服裁断書』大日本和田式洋服裁断講習所, 1916年, 卷頭。
- 25 米田季吉, 前掲書, 5-7頁。
- 26 東京洋服商工同業組合神田区部, 前掲書, 166頁。
- 27 同書の卷頭には, 京都市洋服商組合, 大阪市米国洋服学校, 神戸市洋服商工組合などから寄せられた謝辞が掲載されていることから, 同裁断法が, 東京以外の地域で参照されていた可能性は高い。
- 28 和田栄吉, 前掲書, 86-88頁。なお, 「正度」とは, 上胴圍の二分の一のこと。また, 引用文中に「七分の一は即ち九時」とあるのは, 同論考が, 「日本人の平均身長」「六十三吋」を想定して書かれているためである。
- 29 裁断技術の向上を図る動きに見る欧米からの直接, 間接の影響については, 別の機会に論じる。
- 30 東京洋服商工同業組合神田区部, 前掲書, 164頁。
- 31 本稿第一章で引用した岩村秀太郎の著書のタイトルにも含まれる「裁縫師」という語は, 近代を通じて, 洋服の作り手一般を意味して用いられたものであるが, 一方で, 明治末から大正期にかけては, 縫製工程の担い手というもう一つの意味を生ずる。「裁断師」なる語は, これと前後して, 裁断工程の担い手を意味して用いられるようになったもので, 大会記念帳においても, この語が多用されている。
- 32 米田季吉, 前掲書, 19頁。
- 33 同前, 1頁。
- 34 同前, 3頁。
- 35 管見の限りで, 『日本毛織物新報』は, 東京大学情報学環附属社会情報研究資料センターに大正6(1917)年7月から大正14(1925)年12月までのものが所蔵されているのみである。
- 36 米田季吉, 前掲書, 2頁。
- 37 同前, 88頁。
- 38 同前, 86頁。
- 39 同前, 15頁。
- 40 同前, 88頁。
- 41 徒弟修業の詳細は, 以下の資料にうかがうことができる。辻清, 前掲書。段谷又三郎『洋服界の開拓者関根守治翁奮闘伝』祥光堂書房, 1938年。
- 42 モダンの概念の問題を論じたマティ・カリネスクは, 「西洋文明史上の一段階としてのモダン」が, 「進歩の原理, 科学と技術の実りある可能性への確信, 時間への関心」「理性崇拜」「実用主義の贊美」といった性格を有していたと述べている(マティ・カリネスク『モダンの五つの顔』富山英俊, 梅正行訳, セリカ書房, 1995年, 61-62頁)。
- 43 アン・ホランダー, 前掲書, 7-16頁。彼女の「モダン」の定義は, 「社会的, 個人的な変化の過程に意識的に関わること, 積極的に変化の理念を追求すること」というもので, 文脈によって, 表面的な変化ではない根本的な構造の変化に対する美的志向, あるいは, 「万人に等しく」を希求する民主主

義的志向という意味合いを含む場合もある。

- 44 アン・ホランダー, 前掲書, 145-149頁。
- 45 初田亨『百貨店の誕生——明治大正昭和の都市文化を演出した百貨店と觀工場の近代史——』三省堂, 1993年, 174-175頁。
- 46 門脇厚司「新中間層の量的変化と生活水準の推移」日本リサーチ総合研究所編『生活水準の歴史的分析』総合研究開発機構, 1988年, 232頁。
- 47 ルイーズ・ヤング, 前掲論文。
- 48 中村牧子, 前掲論文。
- 49 日本の既製服産業の歴史は、既に中込省三によって論じられているが（中込省三『日本の衣服産業』東洋経済新報社, 1975年），受容の問題を含めた詳細が明らかにされているわけではない。いくつかの資料は、大正末の段階で、既成洋服の普及を図ろうとする動きがあったことを示している（例えば、『朝日新聞』1921年6月18日 夕刊, 2面に掲載された「既製洋服陳列会」の広告を参照）。他方、東京の洋服店や官公庁勤務経験のある六十代以上の男性を対象に筆者が行った聞き取り調査では、「高度経済成長期に至ってなお、収入が少なくとも、就職したら洋服一式を仕立てるのが一つの通過儀礼であった」との声が多く聞かれた。廉価な既成服が、いつ頃いかなる層に受容されたかということは、今後、注文服との関わりとともに、明らかにされる必要がある。